

荒木繁氏の古典教育論

— 古典鑑賞指導の構造 —

渡 辺 春 美

はじめに

荒木繁氏は、文学教育において、文学の持つ「人間変革」の教育的機能を重視した。古典を文学としてとらえる荒木繁氏の古典教育は、文学教育と同じく、古典の教育的機能を重視するものであった。しかし、その教育的機能に基づく古典教育が、具体的に、どのようになされるのかという授業論的観点からの追求は、先行研究においても、これまで十分になされては来なかった。本論では、まず荒木繁氏の古典観を把握し、ついで古典文学鑑賞の構造を明らかにしたい。

一 荒木繁氏の古典観

古典観を明らかにするにあたって、まず、文学論を概観する。つづいて、歴史社会学派の古典観、ソビエト文学理論の古典観との関連を考察することをおして、荒木繁氏の古典観の特徴を明確にしたい。

1 文学観

荒木繁氏は、「文学の教育的機能はけっして副次的機能ではなく、その本質である」(注1)という把握の

下に、すぐれた文学の教育的機能について、

- ① 現実の正しい深い認識を与える。
 - ② ヒューマニズムの精神をよびおこし、人間に対する確信と生きていく力を与える。
 - ③ 民主主義の精神を強め、解放への勇気を与える。
 - ④ 民族に対する自覚をつちかい、国語に対する愛情をふかめる。
- と、四点を挙げている（注2）。

それぞれの機能に関する説明は、次のようになされている（注3）。①については、すぐれた文学はすべて本質においてリアリズムの文学であり、現実の虚偽や矛盾をすくなくあばくことによって、私たちに正しい現実認識と批判の力を与えとする。さらに、偉大なリアリズムの文学は、ヒューマニズムの精神に貫かれ、ヒューマニズムの精神なしには、現実の矛盾を正しく深く描くところのリアリズムを生み出すことができないと述べる。②については、ヒューマニズムの精神をもって、人間的欲求を抑圧するものとたたかい、人間性を擁護するために書かれていることを挙げている。次に、③については、真の意味のヒューマニズムは、常に民族の解放を求める人間的要求を反映し、民主主義的であることを述べている。さらに、④の機能は、民族のすぐれた文学遺産が持つヒューマニズムの伝統と、最高の美しさを発揮した精華としての日本語とによるとしている。教育的機能が、四つに分けて提示されているが、②と③はほぼ重なるというてよいであらう。

荒木繁氏は、この四つの機能は切り離しがたく結び付いているとしている。文学の機能については、「形象的認識としての文学の機能は、強い情緒性をもって亭受者の知性のみならず感性をふくめてはたらきかけ

るところにその特殊性があり、こうして享受者の魂をゆすぶる全人的感動をとおして人間を変革しようとする。だからすぐれた文学は、享受者の現実認識を深め正しくし、美的道徳的感情を高める教育的機能をもつが、それは常に感動というはたらきをとおしてであり、もし感動が乏しいならば、その文学の変革力は決して人間の深層にまでおよばない。」(注4)と述べている。文学の機能は、全人的感動をとおして発揮され、「美的道徳的感情」を高めるとされている。

2 古典観

(1) 古典観

古典観は、先に述べた、文学の教育的機能の「④民族に対する自覚をつちかい、国語に対する愛情をふかめる。」ということに関連づけて述べられている。

現在、日本の国民がアメリカの植民地状態からぬけ出し、民族の独立を達成する困難なたたかいをすることは、なによりも国民の間に祖国に対する愛情と誇りの意識がなければできないことであろう。私たちは、日本民族の歴史とともに、すぐれた民族の文学遺産を学ばせることによって、生徒たちにほんとうの愛国心をつちかっけていかなければならない。なぜならば古典は(近代文学の古典も含めて)私たちの祖先がそれぞれの時代の現実とたたかって来た魂の記録であり、日本語がその美しさを最高度に発揮した精華であり、また時代をこえて民族によって愛され、まもられて、生きつづけて来たものだからである。私たちの文学教育の任務は、なによりも第一に、すぐれた文学遺産を生徒たちに向

けつがせていくことである。もとより、すべての文学遺産がうけつぐのに値するわけではない。私たちはそのうちのヒューマニズムの伝統を再評価し、それをうけつぐのである。日本の古典の評価は戦前の国家主義と戦後のコスモポリタニズムによって、いちじるしく歪められている。古典の再評価のためには、日本文学研究著、教育者による真に科学的な分析も必要であるが、同時に、古典のもっているヒューマニズムの遺産は、私たちの現代におけるヒューマニズムのためのたたかい―平和と民主主義と独立のためのたたかいの中で、蘇りうけつがれ新しく評価しなおしていくのである。

（荒木繁氏「文学と教育」日本文学協会編『日本文学講座Ⅶ 文学教育』一九五五年一月二五日 東京大学出版会刊 二六八・九頁）

古典が、内容、形態、受容という三点からとらえられている。すなわち①内容―「祖先がそれぞれの時代の現実とたたかって来た魂の記録」、②形態―「日本語がその美しさを最高度に発揮した精華」、③受容―「時代をこえて民衆によって愛され、まもられて、生きつづけて来たもの」という三点である。三点のうちで、古典の条件として、もっとも重視されているのは、①である。文学遺産の「ヒューマニズムの伝統を再評価し、それをうけつぐ」というところから、それが理解されよう。この点に関しては、次に述べる、荒木繁氏の古典評価によっても理解される。

（2）古典観と古典の評価―近松門左衛門に対する評価―

日本文学協会一九五二年度大会（秋季大会）の第一日目（十一月二九日）に行われたシンポジウムにおい

て、荒木繁氏は、「近松と民衆」というテーマで提案を行った。そこでは、近松門左衛門が、三つの観点から評価されている。①徳川幕藩封建性下の苦しみとみじめさとを描いた点、②単なるみじめな民衆の状態を描いたのではなく、その悲劇を描いた点、③民衆的な演劇形式を作り上げた点、という三点である。荒木繁氏は、このうち①②の二つの観点から評価した近松門左衛門について、以下のように述べている。

①については、民衆のみじめな姿が、徳川封権制の抑圧の下の民衆の現実であり、近松がそれを描くことができたのは、民衆の側にたつて現実をみていたということを意味すると述べている（注5）。

②については、悲劇を描いたということは、単なる民衆の受難を物語に描いたのではなくて、そのたたかを描いたということであるとする。民衆が悲劇におちこむ主体の側の要因は、彼らが人間的要求をもち、それをつらぬこうとすることにある。もし彼らが人間的要求を放棄し、四方円くなるように封建的秩序に従順であるならば、かれらの悲劇はない。近松が民衆の悲劇を描いたということは、民衆のたたかを描くことであった。つまり、近松の主人公は人間的要求をとおそうとして封建的秩序と衝突するのである。（注6）

③に関しては、「近松と民衆」の中では述べられていない。③の観点からの評価は、「近松の歴史的意義についての覚書」（注7）によって知ることができる。その中で、荒木繁氏は、以下のように述べている。元禄時代の演劇―特に近松の世話物浄瑠璃―は、本質的な意味での演劇の成立を示すものである。近松の世話物浄瑠璃が本質的な意味で演劇であるといえるのは、近松が当時の社会生活の諸矛盾とそこから生ずる社会的葛藤を悲劇として表現していることによつてである（注8）。

近松門左衛門をこのように評価したうえで、荒木繁氏は、その遺産から何を学ぶかという問題について、国民文学の創造と関連させて、次のように述べている。

その際（国民文学創造の際―渡辺注）、近松が民衆の立場にたつて民衆のたたかきを描いた、あの民衆のとらえ方が十分に学ばれなければなりません。いまでも民衆は近松の民衆がなやんだと同じような苦みと矛盾をなやんでいるのです。そしてそれらが此処の場合悲劇におわることをもちながらも、近松の場合と異なって解放への現実的条件と見通しをもっているのです。そのなかで近松のロマンチズムとことなつた積極的なものに支えられたロマンチズムが生まれて来る可能性もまだあります。

（「近松と民衆」『日本文学の伝統と創造 日本文学協会一九五二年度大会報告』一九五三年五月 岩波書店刊 一四〇頁）

国民文学の創造という観点から述べられているが、近松門左衛門の遺産から、荒木繁氏が学ぼうとするのは、古典観で述べた、①「祖先がそれぞれの時代の現実とたたかつて来た魂の記録」に重なるものといえる。荒木繁氏の古典観で最も重視されているとした観点から、近松門左衛門の中心的な評価がなされている。荒木繁氏の近松門左衛門評価には、「それぞれの時代の現実とたたかつてきた魂の記録」、すなわち、「ヒューマニズムの伝統」に学び、それを継承・発展させていこうとする姿勢がうかがえる。

3 歴史社会学派の古典観

荒木繁氏の古典観とそのもつとも重視されている観点について述べ、その観点が近松門左衛門の評価につながっている点について指摘した。古典は「祖先がそれぞれの時代の現実とたたかつて来た魂の記録」であ

るとする点に、荒木繁氏の古典観の特徴を見いだすことができる。しかし、これは荒木繁氏独自のものではなく、歴史社会学派に特有のものといえる。例えば、歴史社会学派（注9）の一人でもある西郷信綱氏は、次のように述べている。

古典の時代には、階級的矛盾が近代以後にくらべて単純であり、素朴であり、人間が極度の分業によって非個性化されていなかったため、それとたたかい、それを文学的に克服することが相対的に容易であった、そしてそのことによって古典文学は、素朴ではあるがそれなりに「人生の全般的考察」を無意識のうちに実現し、リアリスチックな造形性を獲得することができた。このようにいえる。その点、記紀歌謡を生みだした時代、初期万葉の歌を生みだした時代、宇津保物語や源氏物語を生みだした時代、今昔物語や平家物語を生みだした時代、能狂言を生みだした時代、さらに近松や西鶴や芭蕉等、それぞれにすぐれた古典文学を生みだした諸時代が、それぞれが違った意味で歴史の変革期ないしは転換期にあたっているのは、決して偶然ではないとおもう。それはそれぞれの意味で、また成功したかどうかは別にして、世のなかの現存の制度や秩序のなかにとじこめられている人間性―それは理念的なものではなく生活的なもの―が、みずからを解放しようとして、抵抗し、たたかった時期である。歴史をうごかしてゆく原動力である人民大衆のこうした抵抗やたたかいと、何らかのかたちでもすびつくことによって、右のようなすぐれた古典文学はつくられたのである。

〔遺産としての古典文学〕 西郷信綱編 『岩波講座 文学 第六卷 国民の文学（3）古典編』 一九五四年三月 岩波書店刊 二四・五頁

世界文学について、①「人生の全般的考察」を実現し、「リアリスチックな造形性」を獲得していること、②人間性を解放しようとする人民大衆の抵抗やたかいとむすびについていることが述べられている。この②は荒木繁氏の古典観に重なる観点である。この観点は、同じく歴史社会学派の一人である広末保氏にも見ることができるといえる。

封建時代の詩人であった芭蕉の文学はいうまでもなく封建的な制約をうけている。むろんこのことは、芭蕉の文学が、ただ封建的なものを封建的なままに反映している文学だということの意味しない。なぜなら、後述するように、封建的なものに制約されながらも、なんらかの意味で封建社会の社会的矛盾に対して人間的に抵抗するところからその文学は生みだされているからである。

（同上書「芭蕉の伝統と近代化―方法の問題をめぐって」 一四七頁）

また、古典文学に関してではないが、伊豆利彦氏は、「文学は常に現実に屈服し、妥協することもできぬ精神に支えられている。この精神なしには文学はすぐれたものとなり得ないし、又、すぐれた文学を理解することもできない。」とし、さらに、「文学はこの精神によって、具体的に形象的に現実の種々相を追及し、表面的にはなくそのそこにある社会の本質、人間の本質といったものをえぐり出して、読むものの心にこれらのものを抽象的、観念的ではなく、具体的、現実的に、いきいきと認識させ、そのことによって、この矛盾にみちた、唾棄すべき、変革すべき現実に対する抵抗の意識を読者の心によびさまし、それとた、か

うた、かいの道を教えるのである。」(以上、注10)と述べ、同様の考えを示している。

以上に示した古典観・文学館に共通して見られるのは、文学を人民の「抵抗」との関連でとらえ、そこに「ヒューマニズム」を見いだす考えである。この考えは、文学評価の観点ともなっている。ここに、歴史社会学派の基本的文学観が見いだされる。荒木繁氏の古典観は、この歴史社会学派の文学観・古典観につながりを持つものといえる。

4 荒木繁氏の古典観とソビエト文学理論

荒木繁氏の古典観は、歴史社会学派の文学観・古典観とつながりを持つものと考えられる。しかし、直接には、歴史社会学派がそうであるように、ソビエト文学理論の影響を受けたものと考えられる。荒木繁氏は、ゲ・ニコラーエヴァ「文学の特殊性について」(注11)を読み、「文学の機能、その特殊性というものを考える上で大へん参考になった。」(注12)と述べている。

『マルクス・レーニン主義美学の若干の諸問題』に掲載されている「芸術・上部構造論」には、次のように述べられている。引用は、『マルクス・レーニン主義美学の若干の諸問題』の全訳である、『マルクス・レーニン主義美学 上』によるものとする。

過去の古典芸術はなによりもまずそのなかの真实性、美しい芸術形式に表現された進歩的な思想的内容がわれわれにとって芸術的意義をとどめており、われわれに美的よろこび与え続ける。古典芸術はふつう社会、経済機構に対して弁護的ではなかった。古典芸術はふつうそのような機構の矛盾を基盤

として生まれたのである。もっともすぐれた芸術的作品は主として転換期、きわめて大規模な社会的変革と結びついた時代にあらわれた。そのゆえに古典芸術はなんらかのかたちでいつさいの古いもの、すたれたもの、反動的なものにたいして、社会不正義や社会悪に対して、腐った役にたたぬ習俗にたいして向けられていた。

〔芸術・上部構造論〕『マルクス・レーニン主義美学 上』ソ同盟科学アカデミー編 ソビエト研究者協会訳 青木書店刊 一九五六年四月 二三頁

独裁的・農奴制的機構にたいする憎しみ、専制政治と専横に反対し自由をめざすたたかい、愛国思想、人民性、ヒューマニズムの熱烈な主張——こうしたものがロシヤの古典芸術作品をわれわれに身近なものとしているのである。（同上書「芸術・上部構造論」 二四頁）

過去の偉大な古典芸術は常にすたれたもの、古いものにたいする、その時代の社会悪にたいする、たかいたかいの精神につらぬかれている。ここに真に偉大な芸術の生命力がある。ここに、それが、それを生んだ社会機構や時代がすでに過去へと去った後にも生きつづけるその理由がある。

古典的リアリズム芸術がわれわれにとってその思想的・美的意義をとどめているのはその深い人民性にもよる。それは、なによりもまず摂取階級とたたかうその傾向性の点で、またその源が人民の奥部に、民衆芸術に発するがゆえに人民的なのである。それは人民が創りだした人民的モチーフや芸術的形象を自分のうちに吸収し、完全にせよ不完全にせよ、なんらかのかたちで人民の思考、空想、

希望、夢を表現し、かつ、人民とそれがやがてやかしい未来にたいする愛につらぬかれていた。

(同上書「芸術・上部構造編」 二五頁)

古典芸術の特質が、①美しい芸術形式、②すたれたもの、古いもの、反動的なもの、時代の社会悪に対するたたかいの精神、ヒューマニズム、③人民性の三点からとらえられている。歴史社会学派の古典観に極めて近く、荒木繁氏の古典観に重なるものと考えられる。

さらに、荒木繁氏も読んだと考えられる『歴史文学論』(注13)の著者、ルカッチ(ルカーチ)は、「マルクス・エンゲルスの芸術論序説」の中で、次のように述べている。

ところで人間性、すなわち人間の人間の性質の情熱的探求こそ、すべての文学、すべての芸術の本質に属する。これと厳密に関連してまた、すべてのよい芸術、すべてのよい文学は、それが人間やその人間的性質の真の本質を情熱的に探究するのみならず、同時に人間の人間の純潔をも、それを侵害し、汚辱し、ゆがめるあらゆる傾向から情熱的に擁護するかぎりにおいて、ヒューマニスティックなのである。ところがすべてこのような傾向、勿論そのなかでも人間の人間による抑圧と搾取は、いかなる社会においても資本主義社会におけるほど非人間的なかたちをとることはない――まさに資本主義社会の一見客観的な、事物化された性格のために――から、あらゆる真の芸術家、真の作家は、ヒューマニズムの原理のこの種のいかなる歪曲に対しても、本能的な敵なのである。それは、このことが個々の創造的精神においてどこまで意識されているかにかかわりがない。

（針生一郎訳「マルクス・エンゲルスの芸術論序説（一）」『日本文学』二卷九号 一九五三年十一月号 五七頁）

文学の本質が、人間的本質の情熱的探求と人間的純潔の擁護にあると述べられている。ここでは、人間的純潔の情熱的擁護がヒューマニズムとしてとらえられている。荒木繁氏の古典観の、「時代の現実とたたかって来た魂の記録」に「ヒューマニズムの伝統」をみる考え方は、ルカッチの芸術観につながるものといえる。

以上、考察したことによれば、荒木繁氏の古典観は、歴史社会学派とともに、『マルクス・レーニン主義美学の若干の諸問題』やルカッチ「マルクス・エンゲルスの芸術論序説」に見られるソビエト文学理論と深いつながりを持つものと推察される。

二 古典鑑賞指導の構造

荒木繁氏は、古典から受け継ぐべきものは「ヒューマニズムの伝統」であるとした。それはどのような古典教育によって可能なのであろうか。ここでは、古典鑑賞指導の構造を明らかにすることを目的とする。そのため、まず、文学鑑賞指導の構造を把握し、次いで、文学鑑賞指導に基づき古典鑑賞指導の構造を明らかにしたい。

1 文学鑑賞指導の構造―問題意識喚起の文学教育―

文学鑑賞指導の構造の概容を、次の文章によってとらえることができる。

生徒がある作品に感銘をいただき、感動を覚え、問題意識を喚起されるのは、それこそなにもも奪うことのできぬ主体的真実である。問題は、その主体的真実に立脚しつつ、それをより深めたり、その主観的歪みをただして、より客観的なものにしていくところに、文学の教師の指導性があるのであって、その主観性や自由な感想発表による指導過程のスムーズな進行の混乱を恐れて、生徒の自発的な文学経験の成立を封じることではあるまい。

〔問題意識喚起の文学教育〕『文学教育の理論と教材の再評価』日本文学協会編 一九六七年三月

明治図書刊 三五・三六頁)

ここから、文学鑑賞指導の構造を、学習過程を軸にとらえれば、次のようになる。生徒は文学作品によって問題意識を喚起される。その問題意識に立脚し、主体的に文学作品を読む。主体的な読みを深化、客観化させることによって文化経験の成立に至る。文学経験の成立は、何らかの「認識的価値的変革」が生じることを意味する（注14）。便宜上、分けてまとめれば、①文学作品鑑賞による問題意識の喚起→②より深く客観的な文学作品鑑賞による文学経験の成立（「認識的価値的変革」・新たな「問題意識」の育成）、とすることができ。この①と②をつなぐのが、問題意識である。

次に、この基本軸①②の各段階に関する、教師の指導内容と考え方を見ることが出来る。

(1) 問題意識喚起の指導

この段階に関わる指導については、次のように述べられている。

問題意識喚起の文学教育は、生徒に追従するものとか、教師の指導性を軽くみるものとかいって批判があるがそういうことはない。第一に、教師がこの作品こそ生徒にとって必要であり適切だとし
て与える、その教材選択に教師の指導は決定的に働く。第二に、問題意識喚起の立場に立つ以上、あ
る教材を選び与えることは、その作品が生徒に一定の問題意識を喚起するであろうことを予測し、な
いしは期待するからであって、それが生徒の問題意識を表現させるまでに至らなかつたり、あるいは
それが不十分であつたりするばあいは、教師の方から問題意識を投げかけねばならない。ただし、そ
のばあいもなるべく押しつけにならないように、生徒の問題意識を誘発するように発問のしかたにく
ふうをこらすべきであり、あくまで生徒の主體的鑑賞の道すじと自己発見を尊重していかなければな
らぬことはいうまでもない。

(同上書「問題意識喚起の文学教育」 四〇頁)

問題意識を喚起させるための教師の指導が、教材選択と、問題意識の投げかけという点から強調されてい
る。

教材の選択は、「一定の問題意識」が喚起されることを「予測」・「期待」することによって行われる。こ
の「一定の問題意識」は、文学作品の本質にかかわるもので、作品の鑑賞を深めるものであるとされる。教
材選択は、この問題意識の喚起を考慮して意図的に行われる。

問題意識の喚起に関する指導については、生徒の問題意識の喚起が十分でない場合には、「生徒の主體的

鑑賞のすじと自己発見を尊重」しながら、教師が問題意識を投げかける指導が必要であるとしている。この点、西尾実氏の考え方とは異なっている（注15）。

さらに、鑑賞指導に深く関わる指導に、「主体づくり」の指導がある。荒木繁氏は、「問題意識喚起の文学教育は文学を受けとめる生徒の主体づくりを並行しておこなおうとする。」（注16）と述べ、その大切さについて、次のように述べている。

問題意識喚起の文学教育は、生徒・子どもの主体を重視し、かれらの問題意識を手がかりとして、その文学理解への道を開いていこうとするゆえに、その基礎となる生徒・子どもの主体の形成を大切に
する。

（「文学の授業―その原理・課題・方法について―」『文学をどう教えるか』和光学園国語研究サークル編 一九六五年十月 『生活教育』別冊として誠文堂新光社から刊行 三四頁）

「主体づくり」に関しては、「すぐれた文学はなんらかの意味で鋭い問題意識を読者主体に投げかけるはずであるが、同時に日常生活において問題意識が活発である読者主体であってこそ、作品のなかから豊かな問題意識をくみとっていくであろう。」と、主体形成の必要性が説かれている。荒木繁氏は、『絵本』なら『絵本』といった作品に感動をおぼえるためには、生徒のがわにそれを受けとめるだけの主体的条件が必要である。そういった生徒の人間的主体の条件づくりなしには、文学が教育的機能を果たす土壌は培われな
いといっている。文学教育はそれを培う仕事に参加するのであるが、それと同時に、その仕事には社会科を

はじめとするもろもろの教科教育、その他いつさいの教育活動が参加して来るのである。」(注17)とも述べている。「主体づくり」の指導が、文学教育とともに、その他の教科教育、およびいつさいの教育活動において求められている。文学教育の「主体づくり」にかかわる指導については、「歴史的主体」の形成が提起されている(注18)。

以上から、問題意識喚起の指導について整理すれば、次のようになる。

ア、一定の問題意識の喚起を予測・期待した教材選択。

イ、生徒の主体的鑑賞の道すじと自己発見を尊重した上での生徒への問題意識の投げかけ。

ウ、文学教育・他の教科教育・いつさいの教育活動による、問題意識喚起の基礎としての「主体づくり」。

(2) 客観的な文学作品鑑賞による文学経験の成立

荒木繁氏は、問題意識に立脚した、より客観性のある文学鑑賞を行わせようとする。その指導に関して、次のように説明している。

私の考える問題意識喚起の文学教育は、西尾氏のごとくそれを主体的真実として絶対化し、生活問題の追求といった文学とは離れた方向に展開せしめるのではなく、喚起された問題意識を足がかりにして、より深く主体的に文学作品と対決させる方法である。一読後の感想は、それがいかに主体的に真実であろうとも、誤読・誤解を含み、歴史的認識の飛躍をおかし、主観性・恣意性をまぬかれないことが多い。子供たちは、教師の指導のもとに形象をできるだけヴィヴィッドにイメージ化し、

その相互関連を認識し、その形象組織をつらぬく主題を明確化したとき、初発の感想は補強されてより理性的・自覚的になったり、その一部を修正されたり、あるばあいは根本的に転換されたりするであろう。初発の感想における直感性や主観性は、それを支える既成の価値観を含めて、作品という強烈な存在と葛藤しあい、自己の認識の拡大・深化や価値の変革の中で、より客観性を帯びたものになる。自己の感想の客観化は、自己と作品との間だけでおこなわれるのではない。集団の中で感想を交換し合うことによつて、他の人の感想に触れ、新しい視点を知ることによつて、狭い主観にとじこもつた感想がうちこわされ、より客観性を持つものにまで理性化もされるのである。

（前掲書「問題意識喚起の文学教育」 一八四ページ）

「問題意識」に立脚した指導が二面から考えられている。まず、形象のイメージ化、形象の相互関連の認識と形象組織をつらぬく主題の明確化という、生徒主体と作品とを対決させる指導が挙げられる。ついで、集団の中で感想を交換し合い、学び合う指導が述べられている。荒木繁氏は、この二面からの指導によつて、鑑賞の客観化を図り、文学経験を成立させようとする。

荒木繁氏は、文学経験を「読者主体との火花の散るような交流現象」（注19）としたが、文学経験成立の構造は明確ではなかった。ここでは、問題意識を持つ読者主体が、形象をイメージ化し、その形象をつらぬく意味・主題を明確化することによつて生じる葛藤をとおして、認識の拡大・深化、価値変革を起こすことととらえられる。ここに文学経験成立の構造を見ることができるととらえられる。

2 古典鑑賞指導の構造

古典鑑賞指導の基本的構造の概要は、次の文章によってとらえることができる。

私の民族的自覚と抵抗についての話は、彼らの心の中にうごめきひろがっている問題意識をはげしく揺りたてる役割を果たすものであった。これらの話は万葉の学習とは独立におこなわれたものであったが、それによってゆすぶられた問題意識は、生徒たちの万葉集の鑑賞を主体的でアクチュアルなものにしていった。かれらが万葉の中でもとりわけ防人歌に関心を持ち、教室の中で抵抗論争がまきおこったのも偶然ではなかった。かれらにとって、防人がどういう気持ちで徴集されていたのか、そこには抵抗があったのかなかったのかということ、切実な問題意識だったのである。かれらは防人歌に抵抗があるかないかを問うことによって、自分達と状況との関連をも同じように問うていたといつてよい。

〔「古典教育の課題―『民族教育』としての古典教育』の再検討―』『日本文学』一七巻 一九六六年十月 六五頁）

かれらはなぜ万葉集からそのように強い感動を受取ったのか。もちろん、万葉集がすぐれた文学だからということはあるが、それだけではないように思う。そこには、鑑賞の対象となる文学作品の問題と同時に、鑑賞主体にかかる問題が大きく介在していたと思う。すなわち、生徒たちが己と己を取り巻く現実に問題意識を持ったとき―その問題意識は、自己を梗塞する現実への批判とその梗塞をはねのけて人間的に生きたいという希求など、さまざまな意識のせめぎあいを含むが―そのような主体の

姿勢が古典としての万葉の文学的な命を発見させたということが出来るだろう。

この授業の経験は、私に、生徒の鑑賞力の指導というものは、単にそれだけきりはなして作品の鑑賞をしていけばよいというものではなく、生徒たちの生活の現実に対する認識をふかめ、それに対する批判の観点をすべくしていくことで結びつかなければならぬということを教えた。

(同上誌「古典教育の課題―『民族教育としての古典教育』の再検討―」 六五頁)

ここから古典文学鑑賞の構造を読み取ることが出来る。荒木繁氏は、「民族的自覚と抵抗についての話」を行い、生徒の「心の中にうごめき広がっている問題意識をはげしく揺りたて」た。喚起された「問題意識」によって、『万葉集』の鑑賞は「主体的でアクチュアルなもの」となった。さらに生徒による「抵抗論争」は、生徒自らの鑑賞の交流と検討を促したものと考えられる。荒木繁氏は、その結果として、生徒が「古典としての万葉の文学的な生命」を発見するに至ったと見ている。以上を、生徒の学習過程を中心にまとめれば、①問題意識の喚起→②交流と検討をおした古典文学の主体的鑑賞による「文学的な生命」の発見、となる。ここに、古典文学鑑賞の基本軸を見いだすことができる。さらに、鑑賞に深く関わる指導として、生徒の生活の現実に対する認識をふかめ、それに対する批判の観点を鋭くしていくこと、すなわち、「主体づくり」が必要とされる。

次に、この基本軸①②の各段階における教師の指導内容と考え方を見ることにする。

(1) 問題意識の喚起

荒木繁氏は、「民族意識の喚起」に関する指導について、次のように説明している。

私は万葉の授業そのものの中に直接「民族の誇り」などということばを持ちこみはしなかったが、しばしば国語の時間をさいて、民族の誇りとか民族的自覚といったことに触れていった。あの実践報告（注20 渡辺注）でも紹介したように、私はドーデーの「最後の授業」を読んでやったり、中国の抵抗小説「引力」の話をしてやったりした。「引力」の話をしたときには、「君たちがこういう状態にあつたらどうするか。中国の人々はどのようにしてこのように祖国に対する愛情が強いのだろう。そして私たちはどうしてそうでないのだろうか。」という疑問を投げかけて、生徒たちに感想文を書かせました。

手ごたえはたしかにあった。「最後の授業」や「引力」は、一九五二年の日本の現実を描いたものではなく、一つは普仏戦争によってプロシヤに占領されたアルザス地方の話、一つは、抗日戦下の中国の話であり、時も処も異なっているにもかかわらず、それらは生徒たちに、自分たちのおかれた状況と自分たちの主体のありかたを直視させる役割を果たしたのである。

（同上誌「古典教育の課題——『民族教育としての古典教育』の再検討——」 六四頁）

この指導は、「万葉集を主体的に鑑賞する基礎としての人間主体にはたらきかけ」（注21）るものであった。「当時は、朝鮮戦争の余燼はまだくすぶっていた。警察予備隊が設置され、戦争放棄をうたった新憲法を無視して再軍備がおこなわれつつあった。生徒たちは日本の将来に——つまり自分たちの将来に——不安を感じず

にはいられなかった。メーデーには、たくさんの生徒たちが『徴兵反対!』を叫んで参加した。」という状況を背景として、この指導は、生徒の「心の中にうごめきがひろがっている問題意識をはげしく揺り立てる役割」(以上、注22)を果たした。荒木繁氏は、「問題意識喚起の文学教育」において、問題意識を喚起させるための教師の指導を否定しない。生徒が問題意識にめざめない場合には、むしろ積極的に指導を行おうとした。

この指導方法が特殊な一例ではないことは、次の例によって明らかになる。荒木繁氏は、和光学園高等学校で行った「万葉・古今・新古今」の授業の一部を紹介し、「歌の鑑賞において押さえるべきポイントはちゃんとおさえているし、防人歌の把握のしかたも、西高生のそれとまったく共通したものがあ」と、感想文を書いた生徒のことに触れ、次のように述べている。

私のこの授業は決して成功したものではなかった。というのは、十二年前の実践では生徒たちの問題意識はいわば交響的なかたちで現れたのに対して、この生徒の感想文は孤立した存在であったということである。しかし、この生徒がこのような感想文が書けた背景には、彼女が合宿ゼミナールの主要な参加者の一人であったということがあり。さらに言うならば、合宿ゼミナールに積極的に参加するような主体的な姿勢と問題意識を持った生徒だったということがある。私はこの私立高にもこのような萌芽があることに自信をもち、彼女の問題意識をクラスの中に波及させ、発展させていく可能性を今後どこまでも追求していかなくてはならないと思う。

〔「古典教育の課題―『民族教育としての古典教育』の再検討―』『文学教育の理論』一九七〇年九月

古典文学作品(教材)による問題意識の喚起ではなく、朝鮮高校生二名を招いて夏休みに開かれた、二泊三日の合宿ゼミナールに参加することによって喚起された問題意識によって、アクチュアルな鑑賞が行われた例といえる。ここにも、「鑑賞する基礎としての人間主体にはたらきかけ」ることで、問題意識を喚起する指導方法を見いだすことができる。

(2) 「文学の生命」を発見する古典文学の鑑賞指導

『万葉集』の鑑賞は、喚起された「問題意識」によって、「主体的でアクチュアルなもの」となり、生徒は、「古典としての万葉の文学的生命」を発見したとされた。荒木繁氏は、「私は、人麻呂のほうが憶良よりすぐれているなどという比較論より、人麻呂でも憶良でも赤人でも、それについて人の批評の借りものではなく、自分なりの感じ方をし、それを言えるようにさせることにまず努力をそそいだ。その結果、人麻呂や憶良ではなく、赤人の清澄な歌境に感動しようとも、家持の憂愁繊細に共感しようとも、そこに生徒なりの文学の発見があればいちおうの目標は達成されたと見てよいと思っていた。」(注23)と述べている。鑑賞に必要な歌の理解と、実感の発表に関する指導の後、「文学の生命」の発見は、問題意識に立脚した、主体的な鑑賞にゆだねられているといえる。

しかし、鑑賞に必要な歌の理解に関する指導がどのようなものかは、十分な記述がなく明確ではない。『平家物語』(殿上闇討)の指導においては、内容の理解、形象の把握に関する指導が、次のように述べられ

ている。

私は、「雲の上人これをそねみ」の理由が生徒から簡単に出てくるものと予想しつまずいたが、この箇所に生徒の思考をたちどまらせることによって、「殿上闇討」の形象世界にはどのような視点を媒介として接近すべきかを明らかにすることができた。その意味で、教師が平家の世界をかたちづくっている階級葛藤の歴史的過程についてあらかじめ解説をおこなない、「殿上闇討」の読解にスムーズに入らせる親切なやりかたよりも、生徒をつまづかせ、立ちどまって思考させる方が、指導法として望ましいように思う。これは、生徒たちのこれまでの概念的な歴史知識を、生きた歴史的認識力へと訓練する場にもなるからである。(中略―渡辺) 社会科学は時代の諸現象を構造的に理論化してとらえ、その運動過程の法則性を明らかにしようとするが、文学はあくまで形象を通して歴史的現実をとらえようとするもので、方向こそ異なるが、歴史的認識としては共軌性を持っている。

(「文学の授業―歴史的支店を媒介として―」和光学園国語研究サークル編『続・文学をどう考えるか』一九六六年十二月 「生活教育」の別冊として、誠文堂新光社から刊行 二八・二九頁)

これによれば、内容理解に関して、生徒に主体的に思考させる指導、形象をとおして理解に至らせる指導が求められている。荒木繁氏は、「殿上闇討」の段について、「平家の棟梁としての忠盛の大胆な行動とそれを裏うちする細かな思慮、郎等家貞の献身と勇氣と、これに対する殿上人たちの女性的陰険さと卑劣なやり口との対象をとおして、武士階級の貴族階級に対する人間的優越を生き生きと形象化」しているとみる。荒

木繁氏は、このような形象をとおして、「そねみ」が「階級的・身分的なものにもとづくこと」を理解させる指導によって、歴史的認識に至らせようとする。以上から、「文学の生命」を発見するための内容理解の指導の特色は、生徒に主体的に思考させて、形象をとおして理解させる指導を行うが、理解が不十分な場合には、生徒の主体的思考を尊重した支援的な指導を行うところに見いだされる。

おわりに―考察のまとめ―

以上、荒木繁氏の古典観を把握し、ついで古典文学鑑賞指導の構造を考察した。考察の結果をまとめれば、次のようになる。

1 古典観

① 荒木繁氏の古典観は、内容―「祖先がそれぞれの時代の現実とたたかって来た魂の記録」、形態―「日本語がその美しさを最高度に発揮した精華」、受容―「時代をこえて民衆によって愛され、まもられて、生きつづけて来たもの」の三点からとらえられ、「内容」は、ヒューマニズムにつながるものである。

② 荒木繁氏は、古典教育の目標を古典のヒューマニズムの伝統を継承する点にあると述べる。この姿勢は、ヒューマニズムを古典の評価の観点とするとともに表れている。

③ 荒木繁氏の古典観は、歴史社会学派の古典観、『マルクス・レーニン主義美学の若干の諸問題』に見られるソビエト文学理論の古典観・ルカッチの文学観に深くつながるものとなっている。

2 文学経験を成立させる指導

問題意識を持つ読者主体が、形象をイメージ化し、その形象をつらぬく意味・主題について客観性を持た

せつつ明確化することによって生じる葛藤をとおして、認識の拡大・深化、価値変革を起こすことととらえられる。ここに文学経験成立の構造を見ることが出来る。

3 古典文学鑑賞指導の構造

鑑賞指導の構造を、生徒の学習過程を中心にまとめれば、①問題意識の喚起→②交流と検討をとおした古典文学の主體的鑑賞による「文学的な生命」の発見、となる。ここに、古典文学鑑賞の基本軸を見いだすことができる。鑑賞に深く関わる指導として、ア、「主体づくり」、イ、主體的鑑賞を尊重した支援的な指導、ウ、形象のイメージ化とその意味の理解に至らせる指導、が見出された。

注1 「文学教育の課題」(『文学』一九五三年十二月 二頁)

注2 「文学と教育」(日本文学協会編『文学教育 日本文学講座Ⅶ』一九五七年六月 東京大学出版会 二六三～二七三頁)

注3 注2に同じ。

注4 「文学教育の方法」(西郷信綱氏代表編集『岩波講座 文学の創造と鑑賞 文学の学習と教育』一九五五年三月 岩波書店 四七・四八頁)

注5 「近松と民衆」(日本文学協会編『日本文学の伝統と創造 日本文学協会 一九五二年度大会報告』一九五三年五月 岩波書店刊 一三五頁)

注6 注5に同じ(一三八頁)

注7 「近松の歴史的意義についての覚書」(『文学』一九卷七号 一九五一年七月号 五三頁)

注8 注7に同じ（五三頁）

注9 渡辺善雄氏によると「マルクス主義 (Marxism) に立つ歴史社会学的研究」（『日本近代文学研究の状況』『宮城教育大学紀要』一九八七年 四〇頁）とされ、法政大学の小田切秀雄氏、東京都立大学の森山茂雄氏等を挙げている。浜本純勉氏は、「この派は、文芸の歴史的な役割性を重視する立場で、石川徹郎氏、風巻景次郎氏などがその代表であった。この歴史社会学派の研究者が中心となって、戦後日文学協（日本文学協会）が設立された。日文学協は、戦後の文学研究の主導的な役割を果たすとともに、文学の研究と教育を結ぶための精力的な活動を行い、文学教育運動に大きな足跡を残した。」（野池潤家氏編『国語科重要養護三〇〇の基礎知識』一九八一年八月 明治図書刊 三四頁）と説明している。

注10 伊豆利彦氏「文学教育の任務と方法」（『文学』二〇巻 一九五二年三月号 一七頁）

注11 ソ同盟アカデミヤ・ナウク哲学研究所編『マルクスレーニン主義美学の若干の諸問題』（一九五四年版）。荒木繁氏は、「ソ研『モノグラフィイ・シリーズ』第五集」によって、読んだとしている。しかし、その、翻訳者、出版年次、出版社等については、荒木繁氏にお伺いしたが、不明とのことであった。

注12 「文学教育の方法」（注4に同じ、五七頁）の「参考」の「1」に述べている。

注13 ルカッチ著・山村房次訳『歴史文学論』（一九三八年 三笠書房 「文化と技術叢書」の一冊として出版された。）荒木繁氏が、これを読んだことは、「近松の歴史的意義につての覚書」（注7に同じ、五三頁）によって知ることができる。

注14 荒木繁氏「文学の授業―その原理・課題・方法について」に「文学経験とは作品と読者主体との火花の散るような交流現象であり、その中で読者主体の内部になんらかの認識的価値的変革がおこるのであ

る。』（『文学をどう教えるか』和光学園国語研究サークル編 一九六五年十月 「生活教育」の別冊として、誠文堂新光社から刊行二頁）とある。

注15 西尾実氏「文学教育の問題点」（『文学』二二巻 一九〇五三年九月 九二頁）で、「文学活動経験としての、鑑賞による『問題意識』を、文学機能のもたらすものとしてとりあげるためには、まず、鑑賞者である生徒の鑑賞を、できるだけ純粹な鑑賞にするために、指導者の暗示や影響を極度に避けようとする、潔癖を維持することが、欠くことのできない用意であると思う。」と述べていることに拠る。

注16 「問題意識喚起の文学教育」（『文学教育の理論と教材の再評価』日本文学協会編一九六八年三月 明治図書刊 四十頁）

注17 注1に同じ（二二頁）

注18 荒木繁氏「文学の授業―歴史的視点を媒介として―」（和光学園国語研究サークル編『続・文学をどう教えるか』一九六六年十二月 「生活教育」の別冊として、誠文堂新光社から刊行 一五頁）に、「今回、私たちは、私たちの目指す子どもの生活主体の内容をより具体化するために、これを国民主体の形成という方向においてとらえ、それに歴史的主体という概念を導入してみることにした。歴史的主体というのは、一義的には規定しにくい観念であるが、現代を歴史的過程の中でとらえられるがゆえに、現実に立脚するとともに現実を固定したものとしてみるのではなしに、未来への展望を持ち、現代の課題に立ち向かっていこうとする主体であると、さし当たり云っておこう」とある。

注19 注1に同じ

注20 荒木繁氏「民族教育としての古典教育―『万葉集を中心として』―」（『日本文学』一九五三年十一月）

注21 荒木繁氏「古典教育の課題―『民族教育としての古典教育』の再検討―」（『日本文学』一九六六年十

二月 八五・八六頁）

注22 注21に同じ（六四・六五頁）

注23 注21に同じ（六八頁）